

文字摺通信

第 67 号
2024年 7月 1日
発行:文字摺歴史文化社

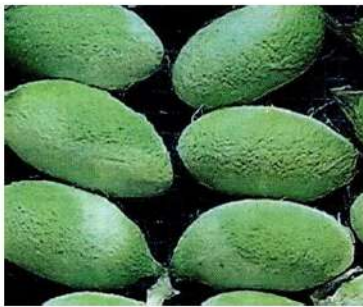
＝信達歴史文化研究会5月例会＝

りょうぜん天蚕の会を訪ねてきました

5月24日(金)、本会の村川会長、小野幹事が入会している「りょうぜん天蚕の会」を訪ねてきました(7名参加)。初めに、伊達市霊山町掛田の八島敏幸さん宅を訪問、玄関には右のような素敵な表札が架かっていました。当主の八島さんは紙漉きも行い、紙布や紙子も手掛け、2階の工房・展示室にはその作品もありま



した。2階では、八島さんから天蚕と家蚕の違いをじっくり教えていただきました。蚕糸業は私のライフワークのテーマの一つですが、天蚕関係については初めて受けるレクチャーで驚くことばかりでした。生で見



る天蚕の繭の大きさに驚きました。家蚕の繭が2グラムぐらいであるのに対し、天蚕繭は6グラム以上もあり、糸の太さも3倍ほどあるそうです。天蚕繭糸は3粒で糸取りをして21デニールの繭糸ができるそうですから、やはり太いですね。ただ、家蚕は2千年以上の家畜の歴史の中で改良を重ねてきましたから、1粒の繭から1300～1400メートルほどの糸がとれますが、天蚕は自然の繭ですので、そこからひける糸は600メートルほど



【八島敏幸氏】

だそうです。また、天蚕の蛾は羽を広げると15cmほどの大きさで、夜になると光を反射して光る4つの「おどし目玉」を持つ、夏になると光を求めて飛んでくるあの蛾なのです。

話はあちこち飛び、霊山の蚕糸業の歴史の話になり、その中で、県内でも最後まで残っていた製糸会社阿部製糸のことがなりました。そこで「ちょっと待ってね」と見せてくれたのが、阿部製糸の名の入った繭袋。蚕糸関係資料として、座繰り器や機織り機、わらだや小杵、揚げ返し機などはたくさん残っていますが、繭の流通の中で使用された繭袋は意外と残っていないのです。ましてや「阿部製糸」と買い手の名の入った繭袋は貴重だね、という話になったら、もう一つ貴重な資料を見せてくれまし

